産大法学　46巻３号（2012.12）

資　　料

第６回法政研究会報告
FD：法学部１年次生に対する教育のあり方を中心に

個別報告者：二本柳高信
中西　勝彦
司会・個別報告者：中井　　歩

平成24年９月13日（木）に４号館会議室において、第６回法政研究会が「ファカルティー・デベロップメント（Faculty Development。以下、FD）」をテーマとして開催された。FDは、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」と定義されている。(1) この日の研究会では、具体的な課題を抽出して議論をするために、「法学部１年次生に対する教育のあり方」を中心的な課題とした。まず本学の教職員３名が本学および他大学における実践例を報告し、その後に参加者による活発な議論が展開された。

二本柳高信氏（法学部准教授）はまず、初年次教育と導入教育との概念整理を紹介した。初年次教育とは、主に大学新入生を対象にした、高校からの「円滑な移行」をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を「成功」させるべく、総合的につくられた教育プログラムであり、その内容は、大学生活への適応や大学で必要な学習技術（読み・書き・批判的思考など）の獲得を目指すものである。一方で導入教育は、学士課程における到達目標が明確である（ナビゲートできる）という前提に立ち、当該学科の専門教育の到達目標を「ゴール」として、ナビゲーションするという発想の下で、「導入」の後の「発展」「展開」「完成」

といった後に続くステップが想定され、国家資格や免許に連動する医・歯・薬、工学などの分野で多用されている。(2)

続いて法学部における導入教育について、共通のテキストを用いて展開されている他大学（京都学園大学、西南大学、東洋大学）の事例が紹介された。(3) これらの大学では、法学入門や基礎ゼミなどの１年次の必修科目を通じて、法学部の学習の基礎となる知識（法律用語、法解釈の方法等）の他、判例の検索方法や読み方、レポートや答案の書き方といった手法ついての修得が目指されている。一般的なライティング技能についても扱う事例があるのに対して、法学の基礎学習に特化した例も見られる。また、ディベートを中心に据えることで法律学の学習の作法を身につけることを目指している大学もある。法学部のスタッフが作成した共通テキストは、初年次教育よりも導入教育の要素が占める割合が大きく構成されているようである。

中井は、初年次教育の事例として、グループワークを取り入れて段階的にレポート作成スキルを修得させている、大阪樟蔭女子大学の「アカデミックスキルズ」の科目内容と授業運営体制について取り上げた。この科目は全学科共通の１年次生向けであり、学科横断のクラス編成の下、グループワークを多く取り入れることで、帰属意識の醸成をはかるとともに、「読み・書き・話す・聞く」の基礎的な言語能力の修得を目指している。文章の要約をゲーム感覚で行うところからスタートし、学期の終わりにはまとまった量の文章を読んでレポートが作成できるようになるように、段階的・系統的な学習内容の構成が特徴である。(4)

さらに、一般教養教育の事例として、「白熱教室」として日本でも広く知られている、ハーバード大学のサンデル教授による「道徳的推論」の授業を取り上げ、TA（Teaching Assistant）を活用した、少人数教育と大講義の体系的な連携のあり方について紹介した。テレビ等を通じて私たちが見ることができるサンデルの講義は、決して自然発生的な討論ではない。毎週割り当てられるリーディング・リストを読み込んだ上で、TA が主宰

する小規模のゼミナールで討議の「稽古」をしてきた「役者」である受講生たちが全体講義という舞台で演ずる、言わば「群像劇」である。こうした「白熱教室」を支える仕組みは、日本の大学のそれとは、予算規模やTAの数、学生対教職員の比率、学生の履修科目数などの面で、大きく異なる。とりわけ、学生に対する評価権までも持つTAの存在は、学部教育の中で大きな役割を担っている。(5)

中西勝彦氏（共通教育推進機構（キャリア教育担当）F工房担当コーディネーター）は、本学において組織的な導入が図られている、ファシリテーションの概念とその実践例について報告した。ファシリテーションとは、集団による知的相互作用を促進する働き（協働促進）であり、自律的な課題解決を促すためにプロセスを中立的な立場から支援を行う、手法や実践のことである。本学では2005年からキャリア科目「キャリア・Re-デザインⅠ」で本格的に導入され、2009年4月からは「F工房」が開設されて専門職員が置かれるようになった。F工房は、学内においてアイスブレイクの提案・実施を行っているほか、演習科目における模擬的な仲裁過程のロールプレイングを通じた教育プログラムの共同開発などを行っている。

科目へのファシリテーションの導入例は2つ紹介された。主として2～4年次生向けの「キャリア・Re-デザインⅠ」では、教職員・先輩学生・専門職社会人と言った多様なファシリテーターが受講生ともフラットな関係で参加し、信頼関係の構築を体験することが出来るようにしている。初年次教育科目である「自己発見と大学生活」は「大学生活の羅針盤」とする科目として位置づけられているが、この科目のために2～4年次の学生による「キャリア科目担当学生ファシリテータ（通称：キャリファシ、無償）」が組織され、担当している。

ファシリテーションでは、主体的な参画と学びが重視される。対話を通じて他律から自律へと受講者を変化させるために、参加者同士の小集団・ネットワークの活性化が目指される。こうした学びの場においては、多様

な立場からの視点を持ちフレキシブルに展開するため、チームとしての運営が重視され、また、結果よりもプロセスそのものについて振り返ることで、学習者が成長を自覚することが重要であると考えられている。

3つの報告の後、参加者からは報告事例についての質疑と議論が行われた。まず、TAやファシリテーターの育成と確保の仕組みについて確認がなされたほか、モチベーション維持・向上のための仕組みについて話が及んだ。予算や人員、大学院生の数やカリキュラム、制度などの様々な点で、日本とアメリカの大学の制度・環境は大きく異なる。ハーバードのようなTAの仕組みを、そのまま持ち込むのは現実的ではない。一方で本学のキャリファシの事例では、自己達成感や（「キャリファシ」にとっての居場所となっている）F工房へのアクセスなどのような、金銭以外のメリットがモチベーションになっているのではないかとの指摘があった。また、ファシリテーターやTAの研修をより体系化してそれ自体を科目とし、実施・展開とあわせて単位認定する可能性についても議論された。

次に、導入教育においては、修得するべきスキルが系統的・体系的であり、かつ比較的明確であるために、テキストやワークブックを使った課題学習やドリルの積み重ねが有効ではないかとの意見があった。その際、受講生の能力の少し上に目標を設定する「加減」が重要であろうとされた。そうした中で、対話を促すグループワークを設定し、ファシリテーションの手法を取り入れることによって、意欲や自律性の向上を促すことが期待できるのではないかとの指摘があった。

最後に、「学びの共同体」についての問いかけがあった。キャリア教育科目に関して言えば、受講生たちは友人たちと普段は話さないような将来についての深い話が出来る人たちのことを「学びの共同体」と認識しているようであるとされた。また、こうした大学の中の「共同体」への帰属意識は、学生生活についての満足感にも寄与しているのではないかとの意見も出された。

今年度は法政策学科の完成年度である。報告された実践例や本研究会で

の議論が、法学部における教育の継続的な改善に資することを願い、研究会報告を終える。

（文責：中井　歩）

註

(1)　中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申　2005年1月28日。

(2)　清家篤「初年次教育の現状と課題～“移行”問題を中心に」中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2006年11月8日。

(3)　法学部導入教育の共通テキストの例としては、京都学園大学法学会『法学の扉』（初版2003年、第3版2008年、成文堂）、武藤眞朗ほか『法を学ぶパートナー』（初版2008年、第2版2012年、成文堂）、西南法学基礎教育研究会『法学部ゼミガイドブック』（2012年、法律文化社）など。

(4)　使用されているワークブックとして、有田節子・川上正浩ほか『アカデミックスキルズA WORKBOOK』（2012年、大阪樟蔭女子大学出版部）。

(5)　若松良樹「サンデル・シアターの舞台裏」『法学セミナーNo.677』（2011年、日本評論社）、伊藤憲二「『ハーバード白熱教室』の裏側：ハーバードの一般教養の授業をサンデルの講義を例にして説明してみる」2010/7/25、「ハーバード白熱教室は日本で可能か？（前編・後編）」2010/8/1、8/8、『Cerebral secreta：某科学史家の冒言録』http://d.hatena.ne.jp/kenjiito/（2012/8/25閲覧）。